退魔一族紅　武者巫女桔梗編

……とある深い山の奥に、空から落ちた星が衝突した。
その星は卵のような丸い形状をしていた。落ちた直後はシュウシュウと白い煙を立て、高い熱を発していたが、やがて収まると沈黙した。
そして、一匹の猿が近づいた時、突如として外郭が割れ、中身が襲いかかったのである。
猿はキィキィと哀れな悲鳴を上げて逃げ出そうとしたが、ソレからは逃れられなかった。ソレは猿の内臓、筋繊維、皮膚の下、さらには脳の中までも侵食し尽くした。やがて猿は沈黙し、身体の全てを乗っ取られた。
かくして、異形と化した猿のバケモノは、本能に従い、行動を開始したのであった……。

この国の闇がまだ深かった時代、世には魑魅魍魎の悪鬼たちが溢れ、人に害を成し、我が世の春を謳歌していた。妖魔とも、魔物とも呼ばれるそのバケモノたちは、集団で、あるいは単独で、村や町を襲い、女をさらい、子どもを喰らい、歯向かう者は皆殺しにして人々を苦しめていた。
バケモノに襲われた人々は嘆き悲しみ、己の身に降りかかった不幸を思って涙したが、非力な彼らにはどうすることもできなかった。人々は長い間、暗くて深い夜の時代に耐えなければならなかった。
それでも人々に希望がなかったわけではない。巫女や退魔師、あるいは力のある武将や徳の高い僧侶らが各地でバケモノと戦っていたからだ。その中でも特に力を持っていたのが、バケモノ退治を専業とする紅の一族である。古来より、この国に巣食うバケモノを退治してきたこの一族は、助けを求める声があれば国中どこへでも赴き、人々を救ってきた。そして今回もまた、東の辺境にて、異形の大猿が村々を襲っているという報せを受けて一族の者

を派遣したのであった。
その者の名は、紅桔梗。武士の父と巫女の母を持ち、一族の中でも特に優れた力を持つ彼女は、これまでに数多くのバケモノを退治してきた強者であった。その美貌ゆえ「美しき武者巫女」と称されることもある桔梗は、これまでバケモノとの戦いで苦戦したことはほとんどなく、西国で暴れていた単眼鬼を退治した時でさえ、ほんのわずかな傷を負っただけであったという。ゆえに、彼女が大猿を退治するため出かけた時も、一族の者たちは桔梗がまた無事に戻ってくると信じて疑わなかった。桔梗も当然、そのつもりであった。
しかし、今回は勝手が違かった。東の辺境に赴いた桔梗を待っていたのは、これまで彼女が見たこともないような異形のバケモノだったのである。
「な、なんだ、こいつは……」
対峙するバケモノと距離を取りながら、桔梗は思わず呻いた。
バケモノは、確かに大猿だった。いや、大猿の形をしているバケモノというべきか。
大猿の形をしたバケモノは異形だった。眼窩には眼球がなく、無数の小さな紫色の触手が生えており、それは両の耳からも生えていた。身体の毛皮は所々が破けており、肉が見えていたが、そこからも触手が生え、ウネウネと動いていた。口には鋭い牙が生えていたが、その中でさえ、やはり無数の触手で溢れ返っており、その一部が外に漏れ出ていた。まるで身体全体が触手状の生き物に寄生されているような大猿だったが、真に恐るべき点はそこではなかった。
「たあああああああああああああッ！」
内心の動揺を隠しながらも、刀を振りかざし、桔梗が果敢に大猿に斬りかかる。大猿の身の丈は桔梗の倍以上もあり、体格差では圧倒的に不利な状況にある。にも関わらず、桔梗は戦いを優位に進めてきた。大猿の攻撃を避け、斬激を浴びせる。大猿との戦いが始まって以降、これまで幾度となく桔梗の刃は大猿を斬りつけてきた。

しかし、無数の斬撃を浴びても、大猿はまったく堪えた様子がなかった。斬撃を浴びたヶ所の肉がすぐに盛り上がり、回復してしまうからである。そしてそこから、また新たな触手が生え、揺らめくのであった。

「い、いったい……どういうことなの……」

桔梗の顔に焦りの色が浮かぶ。これまで、どんなバケモノであっても、斬れば必ず傷ついたし、あの強大な単眼鬼でさえ、これほどまでの回復力は持っていなかった。いったい、目の前にいるこのバケモノはなんなのだろうか。

困惑が桔梗に一瞬の隙を生じさせた。

再度、大猿に斬りつけた時、足下の土がズルリと滑ったのだ。桔梗の体勢が崩れ、ほんのわずかな隙ができてしまった。

「――ッ　しまったッ！」

この隙を大猿は見逃さなかった。巨腕がうなりを発して桔梗を襲い、その身体に強力で強烈な一撃を叩き込んだのである。

「ガッ、ハ――ッ！」

桔梗の身体が木の葉のように宙を舞い、地面に叩きつけられた時、「ぐしゃり」という鈍い音がした。それは骨が折れる音ではなく、全身が軋む音であった。

「ぐ、うぅぅ……」

身体に力を入れるが、入らない。足が震え、腕が痺れ、立ち上がろうとしても、下から崩れてしまい、桔梗は立ち上がることができなかった。

そんな桔梗に向かって、低いうなり声を発しながら、大猿が近づいてきた。

（こ、殺される……）

桔梗はそう思ったが、大猿は彼女を殺しはしなかった。顔にニヤリと笑みを浮かべて、担ぎ上げると、そのまま森の奥深くへと消えて行ったのである。

かくして、桔梗は大猿の捕らわれの身となったのであった。

続きは本編にて